

修士論文(要旨)

2009年1月

高齢者の社会的スキルと社会活動及び生活満足度との関連

指導 長田久雄 教授

国際学研究科

老年学専攻

207J6011

張 艷

目次

I はじめに	1
II 社会的スキルおよび社会活動の先行研究	2
1. 社会活動に関する研究	2
2. 社会的スキルに関する研究	3
III 研究の意義と目的	4
1. 意義	4
2. 目的とリサーチクエスションと研究モデル	4
IV 方法	5
1. 対象	5
2. 手続き	5
3. 調査内容	5
4. 倫理的配慮	7
5. 分析方法	7
V 結果	9
VI 考察	12

引用文献

資料

研究の背景と目的

社会活動への参加は高齢者本人の健康や心理面に良好な効果をもたらすことは先行研究により明らかになっている。約8割の高齢者が自立している日本では、高齢者の社会活動を促進することが注目されている。本研究は、高齢者の社会的スキルと関連する要因を検討し、社会的スキルと社会活動との関連および社会的スキルが社会活動を介して生活満足度に与える影響を明らかにすることを目的とする。

方 法

対象は、A 県生涯大学校受講生および B 県いきがい大学校受講生であった。A 県生涯大学校受講生への配布数は 143、回収数 118、回収率 82.5%であった。そのうち、有効回答数は 116、有効回答率 81.1%であった。B 県いきがい大学校受講生への配布数は 134、回収数 91、回収率 67.9%であった。そのうち、有効回答数は 89、有効回答率 66.4%であった。有効回答が得られた 205 人のうち、年齢、性別、KiSS-18 尺度に欠損項目のない者 183 人（男性 97 人、女性 86 人）を分析対象者とした。

調査内容

調査内容は、社会的スキルを測る指標として KiSS-18 尺度、社会活動の実態を測る指標としていきいき活動チェック表、生活満足度、性、年齢、学歴、自由に使えるお金に対する満足度、親しくしている友人の数を尋ねる質問項目から構成した。

結 果

1. 社会的スキルの学歴の高低による比較

学歴高群の方が低群に比べて社会的スキル得点および下位因子「問題解決」「トラブルの処理」「コミュニケーション」の得点が有意に高いことが示された。

2. 社会的スキルの自由に使えるお金に対する満足、不満足による比較

経済的に満足している人の方が満足していない人に比べて社会的スキル得点が有意に高いことが示された。

3. 社会的スキルの親しくしている友人の数による比較

親しくしている友人数が 0 人と回答した人よりも 1~3 人いると回答した人が、また、1~3 人いると回答した人よりも 4 人以上いると回答した人のほうが、社会的スキル得点が有意に高いことが示された。

4. 社会的スキルと社会活動の関連

社会的スキルと個人活動 ($r = .31, p < .01$)、学習活動 ($r = .17, p < .05$) との間に有意な正の相関がみられた。

5. 社会活動と生活満足度の関連

男性では社会活動と生活満足度との間に有意な相関がみられなかった。それに対して女性では、個人活動、社会参加・奉仕活動と生活満足度の間に、それぞれ有意な中程度の正の相関が

みられた ($r=.30, p < .01, r=.34, p < .01$)。また、学習活動と生活満足度の間には有意な弱い正の相関がみられた ($r=.26, p < .05$)。

6. モデルの検討

社会的スキルと社会活動を潜在変数とし、社会的スキルの3つの下位因子「問題解決」「トラブルの処理」「コミュニケーション」、社会活動の4側面「個人活動」「社会参加・奉仕活動」「学習活動」「仕事」、生活満足度得点を観測変数とするモデルを作成した。このモデルの適合度を検証するために、共分散構造分析を行った。適合度の指標は、男性ではGFI=.925, AGFI=.860, RMSEA=.071、女性では、GFI=.922, AGFI=.853, RMSEA=.052であった。これらの結果から、本研究の分析モデルは適合度の許容水準を満たしており、分析に値することが示された。男女別に共分散構造分析によるパス解析を行った結果、男女ではそれぞれ異なったモデルが構成された。

男性では、社会的スキルからその観測変数へのパス係数はすべて高い値が得られ(.84～.91)社会活動から個人活動へのパス係数は.64、社会活動から社会参加・奉仕活動へのパス係数は.46、社会活動から学習活動へのパス係数は.45であった。社会的スキルから社会活動へのパス係数が有意であった(.41)。社会活動から生活満足度へのパス係数は.13であった。媒介変数としての年齢については、社会的スキルへのパス係数は-.03、社会活動へのパス係数は-.05、生活満足度へのパス係数は-.11であった。

女性では、社会的スキルからその観測変数へのパス係数はすべて高い値が得られ(.74～.90)、社会活動からその観測変数へのパス係数は仕事を除いて、中程度の値を示した(.58～.79)。社会的スキルから社会活動へのパス係数が有意であった(.35)。社会活動から生活満足度へのパス係数が有意であった(.46)。媒介変数としての年齢については、社会的スキルへのパス係数は.17、社会活動へのパス係数は.19、生活満足度へのパス係数は.06であった。

考察

社会的スキルは単なる知識ではなく、他者との交流を通して実践していくことが必要である。学歴の高い人、経済的に満足している人、親しくしている友人の多い人のネットワークが広い。他者との交流のなかで、社会的スキルが実践されたり、他者から社会的スキルを学んだりできたと考えられる。

男女別に共分散構造分析によるパス解析を行った結果、男女ではそれぞれ異なるモデルを示した。女性では、社会的スキルが高いほど社会活動への参加は多くなる。また、生活満足度を高めていくことがわかった。女性は地域での社会活動において、社会的スキルを発揮しながら積極的に他者と交流することが推測される。他者との交流の中で新たな社会的役割を見つけ、その社会的役割を果たすことで生活満足度が上昇すると考えられる。

男女を問わず社会的スキルが社会活動への参加に直接的に影響を及ぼすことが示された。このことから、社会的スキルを高めることによって、社会活動が促進される可能性が示唆された。

引用文献

- 1) 柴田博：8割以上の老人は自立している！. 44-67, 初版, 株式会社ビジネス社, 東京 (2002)
- 2) 杉澤秀博：高齢者における社会的統合と生命予後との関係. 日本公衆衛生雑誌, 41 : 131-139 (1994)
- 3) 芳賀博, 七田恵子, 永井晴美, ほか：健康度自己評価と社会・心理・身体的要因. 社会老年学, 20 : 15-23 (1984)
- 4) 松田晋哉, 筒井由香, 高島洋子：地域高齢者のいきがい形成に関連する要因の重要度の分析. 日本公衆衛生雑誌, 45(8) : 704-712 (1998)
- 5) 香川幸次郎, 仲嶋和夫, 芳賀博：高齢者の社会活動と生活満足度の関係. 日本保健福祉学会誌, 15(1) : 71-77 (1998)
- 6) 久保昌昭, 横山正博：在宅高齢者の閉じこもりに関連する要因. 社会福祉学, 46(3) : 38-47 (2006)
- 7) 内閣府：「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(2003)
- 8) 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和：大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因. 日本公衆衛生雑誌, 53(7) : 504-514 (2006)
- 9) 宇良千秋：高齢者の社会参加の促進・阻害要因. 老年精神医学雑誌, 14 : 884-888 (2003)
- 10) 杉原陽子：社会参加. 老年学テキスト(柴田博・長田久雄・杉澤秀博編), 初版, 255-268, 建帛社, 東京 (2007)
- 11) 奥山正司：高齢者の社会参加とコミュニティづくり. 社会老年学, 24 : 67-82 (1986)
- 12) 金貞任, 新開省二, 熊谷修, 他：地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から. 日本公衆衛生雑誌, 51 : 322-334 (2004)
- 13) 松岡英子：高齢者の社会参加とその関連要因. 老年社会科学, 14 : 15-23 (1992)
- 14) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 柴崎智美, 永井正規, 川上憲人, 五十里明, 尾島俊之, 大野良之：高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衛誌, 44(10) : 760-768 (1997)
- 15) 尾島俊之, 柴崎智美, 橋本修二, 大野良之：いきいき社会活動チェック表の開発. 公衆衛生, 62(12) : 894-899 (1998)
- 16) 菊池章夫：Social Skill 尺度の作成, 東北心理学会四二回大会発表, 東北心理学研究, 38, 67-68(1988)
- 17) 相川充：社会的スキルを測る. 人づき合いの技術—社会的スキルの心理学, 163-198, サイエンス社, 初版, 東京 (2000)
- 18) 藤崎宏子：高齢期の友人関係. 高齢者・家族・社会的ネットワーク, 初版, 85-124, 培風館, 東京 (2000)
- 19) 菊池章夫：Kiss-18 研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6(2) : 41-51 (2004)
- 20) 片山美由紀, 今野祐之：対人関係. 心理測定尺度集Ⅱ(吉田富二雄編), 初版, 170-174 (2001)
- 21) 菊池章夫：社会的スキルを測る：Kiss-18 ハンドブック. 初版, 24-36, 川島書店, 東京 (2007)
- 22) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, ほか：生活満足度尺度の構造；因子構造の不変性. 老年社会科学, 12 : 102-116 (1990)
- 23) 稲垣宏樹, 河合千恵子, 石原治, ほか：中高年期の対人関係スキルに関する研究. 日本心理学会六十四回大会発表論文集, 1069 (2000)
- 24) 岡本秀明：高齢者の社会活動と生活満足度の関連；社会活動の4側面に着目した男女別の検討. 日本公衆衛生雑誌, 55(6) : 388-395 (2008)